学苑 No. 802 (101)～(105) (2007・8)

貴方はジャネット・リーを知っているか

『若草物語』と『ブロンテ姉妹』／『祇園の姉妹』と『細雪』

光 藤 俊 夫

ルイザ・オルコットの原作の映画化『若草物語』(マーヴィン・ルロイ監督／1949) は，南北戦争 (1861-65) に従軍中の父親の留守を預かるマーチ家の四姉妹が，様々な体験を経ながら成長していく過程を，ほのぼのと描いて見せてくれた傑作だ。ストーリーの大半が室内で展開されているので，当時のアメリカのインテリア・デザインがよく観察出来て興味深い。マーチ家もそうなら，隣近所の家も，いわゆるコロニアル・スタイルにちょっと毛が生えた位のもの，つまりは植民地風折衷様式とでも言える物だが，家具調度類もまたいろいろな国の様々な意匠のものが雑居しているのが面白い。

十七世紀初頭からアメリカ大陸への各国からの入植が始まり，独立宣言 (1776) 後，ペンシルヴァニア，ニュージャージー，マサチューセッツなどと共に最初の十三州のひとつに選ばれているニューハンプシャー，そこの今日での州都となっているコンコードが舞台とあってみれば，それはこの国のフロンティア精神とその歴史をおおらかに謳っているように見える。そしてイギリスはウィンザー城周辺の車大工たちが，車輪のスポークを応用して発案したと伝えられている，いわゆる“ウィンザー・チェア”がここでも活躍している。そう言えばこの時代，たとえば「西部劇」などでの小道具でこれがあしらわれていない映画は無いくらいにみんなが愛用していた椅子なのだが，これはなにも乱闘場面なんかで恰好よく壊れてくれるからというわけではない。事実そう簡単に壊れるくらいなら，人が座った時点でもうバラバラだ。西部のあらくれ男にさえ，扱うにも簡便，肌触りもよく，第一丈夫だからこそ，どんな家庭にも愛され利用されていたのだ。

そんなことで言えば，そう，どこの家にも“パイ・セーフ”と言うものが台所の必需品としてあった。焼きたてのパイなどを冷ましておく戸棚で，パンチングメタルで出来た扉は，防虫を兼ねて湿気を逃し，かつまたささやかに装飾的要素も加味されていた。日本でも昭和の始め頃まであった「蠅入らず (ハイラズ)」と呼んだ防虫用の細い針金のメッシュのついた小振りの戸棚が，どこの家庭でも，お膳の傍に置いてあったものだが，ちょうどあれに見合うものと言っていいだろう。残念ながら『若草物語』では，意外にも台所の場面が無く，それを垣間見ることさえ果たせなかったが，多分マーチ家にもそれはあったはずだ。さきの“ウィンザー・チェア”と肩を並べ，これまた今日のアメリカの人たちは大いに郷愁をそそられる家具であるに違いない。ちなみに“ウィンザー・チェア”も前述のようにイギリスから伝わった物だが，“パイ”と言うのも十四―五世紀にやはりイギリスで発案されたもの，ただし肉や魚を詰めての“ミートパイ”などはヨーロッパ式，果物などを使っての“アップルパイ”などはアメリカ式なのだそうだ。

ところで，『若草物語』は何度も映画化されていて，ここで挙げたのは，言うなれば戦後すぐのもので，リメイクされての二番目のものだ。最初のものは戦前，1933年，私もリアルタイムでは観てはいないのだが，戦後にどこかの「名画座」で観て，四姉妹の中では次女のジョー役キャサリン・ヘップバーンが一番華やいで見えていたのを思い出す。それもそうだ，この物語の主役は作家志望の次女のジョーにこそあったのだから。そして今思い起こすと，後々ヘップバーンだけが大物女優として大きく羽ばたき，あと三女のベスをやったジーン・パーカーはそれほども売れず，

四女エミーのジョーン・ベネットも『飾り窓の女』(1944)や『花嫁の父』(1950)などの名画を始め，比較的話題作に多く出演していながら，いわば脇役ばかり，とくに長女役メグをやったフランセス・ディーにいたっては，いつスクリーンから消えてしまったのかさえ判らないくらい。——という具合。

リメイクされた『若草物語』(1949)も，次女のジョー役のジューン・アリソンが主役，なるほど，ここも最初に主役を演じたヘップバーンに準じてか，後々の活躍振りが素晴らしい。すでにして『逃げた花嫁』(1948)やジーン・ケリーとの『三銃士』(1948)でチャーミングな演技を示し，ディック・パウエルとの『猛獣と令嬢』(1950)，ジェームズ・スチュアートとの『グレン・ミラー物語』(1954)，ウィリアム・ホールデンとの『重役室』(1954)，ホセ・フェーラーとの『もず』(1956)，ジャック・レモンとの『夜の乗合自動車』(1955)などなど。なんと1950年代の色々な話題作を賑わした女優さんは多いが，その内の筆頭と言っていい活躍振りを示した一人と言っていいだろう。

しかし，だからと言って49年の三女エミー役のエリザベス・テイラーは言わずもがなの大女優として君臨したし，四女ベス役のマーガレット・オブライエンも名子役の名を後々まで馳せるよう数々の名画に出演しているから，『若草物語』での次女ジョー役以外の女優さんは恵まれないという，33年版のジンクスは，どうやらリメイク版からは当て嵌まらなかったみたいだ(1949年のリメイク版では，原作の三女ベスは四女に，四女エミーは三女に入れ替わっている)。

ついでのことを言えば，94年のリメイク版でのジョニー・デップと共演した『シーザーハンズ』(1990)やコッポラの『ドラキュラ』(1992)などで今までにない女の魅力を発散させ，人気を博し，すでにしてマーティン・スコセッシの『エイジ・オブ・イノセンス』(1993)でゴールデン・グローブ賞を受けてもいた次女役のウィノナ・ライダーはともかく，母親役のスーザン・サランドンも『テルマ＆ルイーズ』(1991)で名演技を披露していた上に，ティム・ロビンスの『デッドマン・ウォーキング』(1995)では遂にオスカー賞を獲るまでの大女優となっている。——とこうしてみると，長女役のメグに扮した女優さんだけは，どの年度の『若草物語』を観てみても，もともと地味な役どころだけに，あまり将来に期待出来ないとしても，とにかく取り敢えず後々まで「地味」で通してしまっているような女優さんばかりが選ばれているようだ。

ところで，たまたまハリウッドの女優ジャネット・リーが亡くなった(2004年10月3日／享年77歳)。そして彼女こそ，実は49年版での長女メグ役を演じた，また付け加えるなら私がリアルタイムで『若草物語』を観た時に始めて知った女優さんだった。そして，しっかりした演技力で，実にしっとりした面倒見のいいお姉さん振りをそつなくこなしていた彼女ではあったが，やはり，他のメグ役同様，たとえばマリリン・モンローやオードリー・ヘップバーンのように華やかでえらい人気の出ることも無く，だから，今日「名前くらいは？」と尋ねても，知らない人の方が多いだろう。そして，何とか気づかせようとするならヒッチコックのスリラー『サイコ』(1960)の，モーテルのバスルームでシャワーを浴びていて，何者かに鋭利な刃物で刺し殺されるシーンを演じたあの女優さん，と言えば，あの映画を観ていない人でも「ああ！あの人」と大抵の人はほんのりであろうと，口を大きく開け，悲鳴を上げているあの女性の顔を思い出すことだろう。それは，ヒッチコックでなくともだが，スリラーの話になると必ずと言っていいほど，そのシャワーのシーンを映し出して見せるということがテレビなどでもよくあり，その都度恐ろしい印象で見入ってしまっては，リーの「その顔」を目に焼き付けてしまっている，そのせいでだ。実はそう言っている私でさえ，ジャネット・リーと言えば『若草物語』での四人姉妹の長女メグ役の彼女よりも先に『サイコ』での浴室の裸身を思い出す。しかもそれは，きわめて強烈に目に浮かぶのが常だ。あれ以外に彼女を思い付くことはすでにして無い，と言える。それほどリーは地味な女優さんであり，同じハリウッドの大スター，トニー・カーティスとの結婚，離婚というのが有るくらいで私生活で艶やかな噂など無かった人だった。

そう言えば，ついこの間，あの『卒業』(1967)で若い主人公ダスティン・ホフマンを魅惑する魅力的なミセス・ロビンソンを演じたアン・バンクロフトがリーの後を追うようにして亡くなった(2005年6月6日／享年74歳)が，ここでまたしても懐かしい女優さんが亡くなり，ハリウッドもいよいよ代変わりの季節を迎えたと言う感がある。それに引き換え，これは「姉妹」の話とは直接関係は無いが，

つい最近の映画『8人の女たち』(フランソワ・オゾン脚本監督／2002) では，私が始めて洋画で観て覚えたフランスの女優さん，ダニエル・ダリュウ (1917年生まれ) を筆頭に，『シェルブールの雨傘』(1964) のカトリーヌ・ドヌーヴ (1943年生まれ) や『隣の女』(1981) のファニー・アルダン (1949年生まれ)，また『ボヴァリー夫人』(1991) のイザベル・ユペール (1955年生まれ) や『美しき諍い女』(1991) のエマニュエル・ベアール (1965年生まれ) など，いずれも忘れ難いフランス系の女優さんたちが健在であるのが懐かしくも嬉しい。

ところで，「姉妹」を軸にしてのものに仏映画『ブロンテ姉妹』(アンドレ・テシネ監督／1978) というものもあった。あの「ジェーン・エア」(1847) を書いたシャーロットと「嵐が丘」(1847) を著したエミリ，そして「アグネス・グレイ」(1847) を創作したアン，イギリスが誇る偉大なる女流作家三姉妹の物語だ。舞台は，当然のことながら，三姉妹が育ち過ごしたイングランドの北ヨークシャーのハワース，冬の季節にはペニン山脈からの吹き下ろしが大変に厳しいだろうと思わせる荒野に，ほとんど墓場の真ん中にといった所にぽつんと建つ粗末な石造りの二階家 (ちなみに，北の家の大方は石造りで，木造家というのは南の方に多い。これ，その土地土地で取れる材料に関係しているとみるべきか)，早くに母親を亡くして，牧師の父親と伯母に育てられた三姉妹は，いずれも文学に夢中になるのだが，もはや“産業革命”の火蓋も切って落とされようとしているそんな時代を迎えようとしていながら，さる高名な詩人から，「女には文学は不用，もっと他に大切な仕事があるはず」と窘められたせいで，最初に試みた三人合同の詩集も男名で出さねばならないという配慮が必要だった。しかし，作者はひょっとして女性であるかも知れない，と勘繰られて，斯界を騒がせる。

さて，シャーロットの直ぐ下の弟のブランウェルは，画家になることを志していたのだが，家庭教師先の人妻ロビンソン夫人に，いわば横恋慕し，それが報われず悩みを募らせ，遂には精神に異常をきたしてしまい，若くしてこの世を去る。この間に，彼は自画像を兼ねて，姉や妹たちと一緒の家族像とでも言うべき一枚を描き上げる場面も挟まるのだが，彼が気晴らしに利用する近くの旅籠にあるパブ「黒牛亭」のシーンも興味深い。

いずれにしても，この荒野の中では「詩を書いているか」，「絵を描いているか」，「お酒で癒すか」――とそんなことくらいしか過ごしようが無いと思えるのだから，何ともやるせない。ま，とにかく荒涼たる平原の，いつも低くグレイがかった雲が垂れ込めていて暗く，したがって陰気な環境の中での姉妹たちの生活は，たまたま，詩だか散文を部屋の一角で読んでいるアンの姿がラファエル前派のダンテ・ガブリエル・ロセッティの女性像「ベアタ・ベアトリクス」を想起させるような，実にロマンチシズムに溢れたショットで捉えられているところがあっても，それとは全く裏腹に，さきの環境に準拠してやはり全編「暗くて陰気」だ。

あの男女の愛憎劇と陰湿な復讐劇が他にその例を簡単に探せないほど際立った物語として描かれた『嵐が丘』(ウィリアム・ワイラー監督／1939／ヒースクリフ＝ローレンス・オリヴィエ／キャシー＝マール・オベロン) も，比類無き孤独に打ちひしがれた冷酷な狂気の中での絶望感をややスリラー風に物語って見せた『ジェーン・エア』(ロバート・スティヴンソン監督／1944) も，『ブロンテ姉妹』に観るあの殺伐とした風景からでなければ誕生しまいと思わせる。そう，私はヨークシャーのハワースを訪ねたことはないが，『嵐が丘』でも度々画面に登場ししかもかなり重要なセッティングとして利用されている，農地や放牧地を仕切り，また例の石積みの壁を持つ家を囲ってしつらえられている背の低い石垣 (dry-stone wall) が象徴付けている，粗野で質素な，それでいて頑固な雰囲気こそ，三姉妹の作風を促しているもの，とそんな気がする (そう言えば，『若草物語』(1949) でも，しかしここでは家を囲む木柵だが，次女のジョーが，いつも正門を利用せずにこれを飛び越えて出入りするのを面白く見せてくれた)。

ところで，『ブロンテ姉妹』はフランス映画だし，役者さんたちもみんなフランス人だ。だからセリフはフランス語だ。余計なことだが，フランス人がイギリス人の役をやっても，さほど不思議でも無く観られるのだろうか。日本だとそうはいかない。中国，韓国とか東洋人になら何とか化けられても，欧米人には，相当の工夫がなければ，とても成りおおせない。もっとも，あちらの映画館では，「字幕スーパー」というより自国語に吹き替えてある場合が多い。全てが全てそうだとは言えないが，香港で「寅さん」が広東語を喋っているのを観たことがあるし，テヘランで

グレゴリー・ペックがペルシャ語で話しているのを観たこともある。ま，そういうことであれば，国籍の違う役者さんが別の国の人に扮していても，テレビを観ている感覚で観られはするだろう。――ちなみに，日本での翻案による『嵐が丘』（吉田喜重監督／1983）は，時代を鎌倉‥室町期に設定し，たとえばヒースクリフを「鬼丸（松田優作）」とし，キャシーを「絹（田中裕子）」と名を変えてある。またメキシコで制作された『嵐が丘』（ルイス・ブニュエル監督／1953）は，特別な時代設定は無いが，ヒースクリフは「アレハンドロ」，キャシーは「カタリナ」になっている。

さて，日本映画の「姉妹」物も挙げておこう。文芸物では，たとえば室生犀星の『あにいもうと』（成瀬巳喜男監督／1953）があるが，名作の誉れ高い依田義賢脚本の『祇園の姉妹』（溝口健二監督／1936）を先ずは取り挙げておく。昭和の始め頃の京都での話で，昔気質の梅吉と言う名の姉（梅村蓉子）と大正モダンを引いての近代風でおキャンな「おもちゃ」こと妹（山田五十鈴）の姉妹芸者の身辺を描いて粋でありながらも，切ないしがらみの世界を展開させ，京都の美術学校に通っていた頃を思い出し，何とも懐かしいフィルムではあった。もちろん，これが封切りされた時は，現代そのものの描写であって，その時の京都の観客たちなら，ごく身近の周辺で見かけている諸事を粉飾したものに過ぎない，そんな話ではあっただろうと思う。もっとも，1936年の作品だから，私はリアルタイムで観たわけではなく，後になってVHSで観て，久し振りに清水（きよみず）さんの三寧坂や木屋町筋の路地などに出会った，という感じだった。

何にしても，この映画も，決して明るく楽しい代物では無い。梅吉を囲っている旦那（志賀廼家弁慶）の店が倒産し，その旦那が姉妹の住んでいる木屋町辺りの町家に居候することになるのだが，妹のおもちゃはそれを嫌い，あくまで旦那の面倒をみようとする梅吉を騙して別れさせ，別の羽振りのいい骨董屋の主人に乗り替えさせる。そして，また自分に惚れている呉服屋の番頭（深見泰三）を振ってしまい，その呉服屋の初老の主人（進藤英太郎）と懇ろになり，服装も着物から洋服に替え，結構なセレブ振りを謳歌する。結局は梅吉もおもちゃに騙されていたことに気付くのだが，とにかくおもちゃの勝手気儘な奔放さが祟り，例の番頭からの仕返しで大怪我をさせられ，そして「芸者みたいな惨めな商売がどうしてこの世にあるんや」とおもちゃがうそぶき，この映画は終わる。

京都のところどころのかつての情景に心惑わされながら，登場人物の総てが（終幕部分のおもちゃを別にして）男も女も着物姿であったということも，つまりは大正から昭和に代が変わり，今までの古いしきたりも人情を変えていく，そんな世情の一齣を，「芸者」という女性の生き方をモデルに描いて見せた，それも京都という古い都市，古い街での話というところで，深い味を持たせた物語ではあった。ここで執拗に戻ることもないが，『祇園の姉妹』で姉の役をやった梅村蓉子が準主役で出た映画は，それに続いた同じ監督の『浪華悲歌』（1936）以外に私は知らない。

そして，日本の姉妹物で取り上げないわけにはいかないのが，文芸物で，しかも「四姉妹」，まさに『ブロンテ姉妹』と対抗すると言っていい谷崎潤一郎の『細雪』，そしてその映画化だが，私がリアルタイムで観たものは三本あって，いずれも傑作だとは言えるのだが，一番最初のものは阿部豊監督の東宝映画（1950），「四姉妹」は上から花井蘭子（ちなみに関西では長女を“いとはん”と称し，妹あるいは末っ子の女の子を“こいさん”と呼ぶ），轟夕起子（なかんちゃん），山根寿子（ちいちゃん），高峰秀子（こいさん），――とこう書いたところで，昔の時代劇にはもう欠かせない人の如く，ほぼ日活映画で活躍していた名花市川春代の写真入りの訃報（2004年11月18日逝去）が新聞に記載されていたのを思い出した。享年91歳とあったが，この人を始め，この最初の『細雪』の「四姉妹」の女優さんを覚えている人はもう少ないだろう。随分早くに故人となってしまったが，黒澤明の出世作『姿三四郎』（1943）での「三四郎」の恋人役で出演していた轟夕起子，またたとえ健在であり，映画界における大先達，そしてあの『二十四の瞳』（1954）の高峰秀子の名を挙げたとしてもだ。二番目というか1959年に島耕二監督によってリメイクされた大映のそれは「いとはん」に轟夕起子，「なかんちゃん」に京マチ子，「ちいちゃん」に山本富士子，「こいさん」に叶順子というキャストだった。

ところで，今更この物語の筋書きを紹介するまでもないだろうが，昭和の始め，それからいよいよ長い戦争の時期に入ろうとしていた頃の大阪船場の老舗の船問屋蒔岡家も暖簾を手放すことになり「斜陽」となるそんな時この家の

「四姉妹」の，いろいろと込み入った話の顚末（「こいさん」の駆け落ち騒ぎと「ちいちゃん」のお見合い話を骨子にしている）を描いた話だが，上本町の「いとはん」の家の造りや，そこでの暮らしのしきたり，あるいは船場あたりの品の良い大阪弁など，私が生まれ育った都市でのことに，ちょっとした郷愁を感じさせられる。また嵯峨野の桜の景色や当時のカフェのシーンなども，小さい時分に見覚えのある風景といった趣だったのが，この映画の奥行きを深めているような気がする。もちろん，一番最初のものや二番目にリメイクされたもの一つ一つの画面などの情景など定かでは無い。しかし，あの映画が，と言うか，谷崎の話自体に流れている情感は，ちゃんと，それぞれの映画に再現されていて，私の故郷が舞台だけに，今見直してみても，きっと涙が出るくらいに懐かしいのだ。そして最も新しい『細雪』(1983) は再び東宝での市川崑監督で，「四姉妹」の姉の方から『君の名は』(1953-54) の岸恵子，『越後つついし親不知』(1964) の佐久間良子，『キューポラのある街』の吉永小百合，この時新人の古手川祐子などだった。この辺りになると辛うじて『8人の女たち』に準じて「四姉妹」の錚々たる女優さんたちの芳しさと健在振りを讃えたくなるではないか。もっとも，そうは言っても，最後のものも封切られてすでに20年を過ぎている。軽く思い出せても，そんなに強い感傷とはならないというところだろうか。

映画『サイコ』に於けるジャネット・リー
(村岡マリ画)

（みつふじ　としお　　本学名誉教授）